

国木田独歩「春の鳥」論

青 木 文 美

はじめに

国木田独歩が「白痴」や「狂女」を描いた作品に「源叔父」（『文藝倶楽部』、一八九七（明治三〇）・八・一〇）、「春の鳥」（『女学世界』、一九〇四（明治三七）・三・一五）、「波の音」（『文章世界』、一九〇七（明治四〇）・一・一五）がある。「源叔父」の「紀州」や「波の音」の「狂女」は、「忘れえぬ人々」（『国民之友』一八九八（明治三一）・四・一〇）に描かれた「ほんの赤の他人であつて、本来をいふと忘れてしまつたところで人情をも義理をも欠かないで、しかもついに忘れてしまふことのできない人」と同じ系列の人々として登場している。これらの登場人物は、語り手の前を通り過ぎていくだけのような印象を読者に与えている。⁽¹⁾「源叔父」では、語り手の共感や同情の対象は、「源叔父」であり、「波の音」では、語り手である「私」が見たこと、経験したことが全面的に描写されている。従つて、「紀州」や「狂女」の描写部分から語り手の共感や同情を読み取ることは難しい。

しかし、「紀州」や「狂女」語り手の前を通り過ぎるだけのような印象を与えつつも、「ついに忘れてしまふことのできない」存在であることを考えると、これらの登場人物は語り手の心に深い印象を与えていたことは間違いない。特に、「狂女」は、それまでのストーリーから切り離されたように、突然登場する。読者は、語り手たちの見た光景として「狂

女」の奇異な行動に出会う。

何事か喚きながら此方へ駈けて来て、自分達の居る所でバタリ足をとめ、暫時く考がへて居たが、自分達の直ぐ傍を掻き分けて、猿の如く敏捷に砂山の頂上に上つて了つた。

語り手たちの心を揺さぶった「狂女」の異様な姿がそのまま描写されている。

ところが、「春の鳥」の「六蔵」は、読者にはかの作品に描かれた「白痴」と異なった印象を与えている。語り手である「私」と「六蔵」との間に、「紀州」や「狂女」の描写には見られない一体感がある。「春の鳥」は、ほかの二作品とくらべ、語り手と「白痴」である登場人物との関係が密接である。「源叔父」では、語り手は「源叔父」について語っている。それが間接的に「紀州」を語ることもなっている。「波の音」では、語り手と清兵衛が目撃した人物として「狂女」が描かれている。これらの作品では、「白痴」や「狂女」は語り手にとって常に第三者でしかない。しかし、「春の鳥」の場合は、語り手は「白痴」の「六蔵」と対峙している。その結果、「六蔵」に共感を覚え、同情もしている。語り手と「白痴」との対峙は他の作品には見られない点である。同時に、他の作品では描かれなかった語り手と「白痴」との一体感を読者に印象づけている。

独歩が、「春の鳥」で語り手と「白痴」を対峙させたのは、佐伯時代に実際に白痴の少年の教育に骨を折った経験からだろうか。「春の鳥」のモデルは、佐伯時代に出会った山中泰雄であることは多くの先行研究によって言及されている。⁽²⁾先に書かれた「可憐児」(一八九三(明治二六)・一一・二八―二九)から約十年を経て、なぜ、また同じモデルを主人公にした作品を書いたのだろうか。中島礼子は、「可憐児」から「春の鳥」への白痴をめぐる改変について「その間に独歩が接した白痴および白痴教育の記事から得られた知識をもとに、当時の人々の納得のいくかたちへと整えるための作業」⁽³⁾だったと指摘している。

中島のように、「可憐児」と「春の鳥」を約十年の間に独歩が接した白痴および白痴教育にまつわる情報に注目しつつ、

連続する物語として読むことは可能である。しかし、一方で「春の鳥」を一つの独立した作品として読み解くことも必要ではないかと考える。そこで本稿では、「春の鳥」と白痴教育に関する先行研究をまとめた上で、この作品に登場するワズワスの「童なりけり」の「梗概」に焦点を当てて、改めて「白痴」の少年を主人公にした「春の鳥」の意義を考えたい。

一、先行研究に見る「春の鳥」と白痴教育の関係

「春の鳥」には「白痴教育」について触れた箇所がある。

白痴教育といふ^マが有ることは私も知つて居ますが、これには特別の知識の必要であることですから私も田口の主人の相談には浮かと乗りませんでした。たゞ其容易でないことを話したゞけで止しました。

引用部分からも分かるように、「春の鳥」における物語の展開を考える上で白痴教育を度外視することはできない。そのため、現在に至るまで多くの先行研究においてその相関関係は語られてきた。なかでも、特に重点的に検証されてきたことが二つある。一つは、独歩がいつ白痴教育についての知識を深めたのかという点。さらにはその知識が作品にどのように反映されているかという点である。独歩の白痴観、または白痴教育観は「可憐児」と「春の鳥」の白痴教育に関する記述の差異から読み取られている。

実証的な研究により、現在、独歩がいつ頃から白痴教育の知識を深めていたのかほぼ正確に知ることができる。⁽⁴⁾ 独歩は内村鑑三の「流竄録（一）白痴の教育」[『国民之友』第二百三十三号、一八九四（明治二七）・八]、「瀧の川学園」での見聞から白痴教育の実態を学んでいる。⁽⁵⁾

そして、「可憐児」と「春の鳥」との白痴及び白痴教育の記述から、白痴教育にまつわる知識がいかに作品に反映されているかが検証されている。中島は「主に内村鑑三「流竄録（一）白痴の教育」に依拠し、それを「瀧の川学園を観る」

その他に拠つて補強してゐるのではなからうか」という観点に立ち、先行研究をもとにして三箇所の記事について次のように述べている。⁽⁶⁾

一つめは「六蔵とその姉おしげの白痴の原因が父の大酒と母の遺伝」という設定についてである。六蔵たち姉弟の白痴の原因として、母の遺伝説と父の大酒説は別々に言及されていたが、それらの説をまとめてゐる。母の遺伝に関しては、新保邦寛が、「流竄録(二)」の「白痴院の目的」に書かれた「是等人類中の廃棄物を看守し、一方には無情社会の嘲弄より保護し、他方には男女両性を相互より遮断して彼らの欠点をして後世に伝へさらしむるにあり」を根拠にして、「六蔵の白痴が母の遺伝であり、姉もまた白痴という設定も、この内村の文に一致する。」と指摘していることを支持してゐる。⁽⁷⁾また、父の遺伝に関しては、橋川俊樹の指摘通り、「瀧の川学園を觀る(二)」の「氏の教育せる孤兒院に白痴少なからず、此等は早く親に別れたるため、又は父母の飲酒過度梅毒遺伝等の為に脳其の他に發育不良の部分を生じたるものなる」ことをあげている。

二つめは六蔵が「いかなる鳥を見ても鳥」といったことについてである。六蔵が「白鷺を見て鳥といった」理由は、「黒白の識別ができなかつたから」だと指摘し、その根拠は、「瀧の川学園を觀る(二)」の「▲白痴生 実に東も西も分からぬ憐れなる者にして青赤白等の色の区別さへ出来得ざるなり」に拠つたと考えゐるとしてゐる。

三つめは「白痴となると、心の唾、聲、盲ですから殆ど禽獸に類して居るのです」という記述についてである。「人間」の「廃物」、「人類中の廢棄物」、「社会の廢棄物」、「社会の妨害物」(「流竄録(二) 白痴の教育」)や「石井氏の言に曰く白痴兒は無感覺なり」(「瀧の川学園を觀る(二)」)をもとに当時の白痴觀をとらえようとしてゐる。

これらの検証から、「可憐兒」から「春の鳥」への白痴および白痴教育の明確な記述の差異について指摘し、「その間に独歩が接した記事から得られた知識をもとに、当時の人々の納得のいくかたちへと整えるための作業」が行われたと結論づけている。そして、「このような『白痴』認識・『白痴』をとりまく状況下で、どのようにしたら『白痴』と目される

児童を救済し、一編の物語の主人公として蘇生できるか」という問題点をあげている。

「可憐児」から約十年の月日を経た独歩は、「春の鳥」で何を描こうとしたのか。なぜ、六蔵は死ななければならなかったのだろうか。そこで、「春の鳥」後半部分で読者に六蔵が死んで鳥として飛翔したという印象を与える要因になっているワーズワスの詩の「梗概」について考えることにしよう。

二、ワーズワス「童なりけり」と「春の鳥」に書かれた「梗概」

独歩が熱心にワーズワスを読んでいたのは、「春の鳥」の舞台でもある豊後国佐伯に赴任中である。独歩は、「不可思議なる大自然、ワーズワスの自然主義と余」（『早稲田文学』第二十七号、一九〇八（明治四一）・二・一）にワーズワスの関係について次のように書いている。

余が初て短編小説を書いたのは今より十年以前である。それより更に五六年前余は覚束なき英語教師として豊後国佐伯町に一年間滞在して居たが、当時余は最も熱心なるワーズワス信者で、而てワーズワス信者に取りては佐伯町は実に満目悉くワーズワスの詩編其物の感があつたのである。山に富み溪流に富み、溪谷の奥に小村落あり、村落老て物語多く、実にワーズワス信者をして「マイケル」の二三は此処其処に転がつて居そうに思はしめた位である。ワーズワスへの没入ぶりは、この随筆に掲載された「明治二十六年十二月二十日より末日までの日記」の抜粋からも読みとれる。

人若し我に向て汝が文学者詩人としての目的は何ぞや問はゞ我れ答ふるに窮せざる也。

曰く此独立の霊が知り能ふ丈け、観得る丈け、感じ得る丈けをありのまゝに筆にのぼすにあるのみ。

然り余は独立にして自由なる一個の霊なり当に自由を観、自由を感じ、自由に現すべし。

大自然の中で、ワーズワスの詩のような風景をいたるところで目にして刺激を受けたことは想像に難くない。

ワーズワスの詩が読まれるようになるのは、明治二十年代に入ってからである。『新体詩抄』（外山正一、矢田部良吉、井上哲次郎、丸屋善七、一八八二（明治一五）・八）、『小説神髓』（坪内逍遙、一八八五（明治一八）・四）によって西洋の詩を受け入れる下地が生まれ、ようやく二十年代中期に入り宮崎湖処子、植村正久等によって、ワーズワスが日本に紹介される⁽⁹⁾。

「童なりけり」の引用を見てもわかるように、ワーズワスの詩が「春の鳥」に影響を与えていたことはいうまでもない。具体的に影響を与えた作品は、「童なりけり」（原題 “There was a boy”）と「白痴の少年」（“The Idiot boy”）⁽¹⁰⁾ 二作品であるといわれている。特に、「There was a boy」の影響が強いことは「梗概」の挿入からもわかる。

「春の鳥」における「童なりけり」の「梗概」は次のように書かれている。

それは一人の児童が夕毎に淋しい湖水の畔に立つて、両手の指を組み合はして、梟の啼くまねをすると、湖水の向の山の梟がこれに返事をする、これを其童は楽しみにして居ましたが遂に死にまして、静かな墓に葬られ、其霊は自然の懷に返つたといふ意を詠じたものであります。

「白痴」の子ども六蔵が、不慮の事故で命を落とした後で「梗概」が描かれる。六蔵の死を受けて「私」は、かつて六蔵を「白痴ながらも少年はやはり自然の児」だと認識した天守台で人生について考えることになる。自己の人生観と六蔵の死。特に、六蔵の死について熟考しその意味を見出そうとする場所に「梗概」は挿入されている。その結果、読者は、「私」の解釈に沿って「梗概」を読むことになる。さらに、読者は六蔵の魂が「童なりけり」の少年と同じように「自然の懷」へ返つたと想像することになる。

では、実際にワーズワス “There was a boy” はどのように書かれているのだろうか。特に、「梗概」の最後の部分、「遂に死にまして、静かな墓に葬られ、其霊は自然の懷に返つた」に注目してみたい。この部分は、原文に次のように記

むれつる。

This boy was taken from his mates, and died
In childhood, ere he was full twelve years old.

Pre-eminent in beauty is the vale

Where he was born and bred: the church-yard hangs

Upon a slope above the village-school;

And, through that churchyard when my way has led

On summer-evenings, I believe, that there

A long half-hour together I have shood

Mute—looking at the grave in which he lies!

「遂に死にまじつ」と対応してゐるのは「and died/In childhood, ere he was full twelve years old.」の部分である。この部分からも分かるように「This boy」は「幼少期それも一二歳になる前に死んでゐる。「春の鳥」の六蔵も「十一か十二歳ぐらゐと思はるゝ男の児」として登場する。ワーズワスの「There was a boy」を知るものは「童なりけり」という題名を見ておおよその見当をつけることができるのではないだろうか。また「Mute—looking at the grave in which he lies」は「静かな墓に葬られ」と解釈される。「梗概」では続いて「其霊は自然の懷に返つた」とされている。ここは、言外にある余韻をことばにしたものであり実際に詩には表現されていない。「英語の教師」をしている「私」が読みとつた詩の世界なのである。

“There was a boy”の言外にある世界を「梗概」のなかに組み込む。「童なりけり」は、六蔵の死が「自然の懷」に返つたと読者に読みの方向付ける効果がある。「梗概」に続く部分をもう少し引用すると、「私」が語ろうとした意味が

はつきりするのではないだろうか。

私はこの詩が嗜きで常に読んで居ましたが、六蔵の死を見て、其生涯を思ふて、其白痴を思ふ時は、この詩よりも六蔵のことは更に意味あるやうに私は感じました。

六蔵の「死」に対して語り手である「私」は、「童なりけり」の「梗概」をふまえた解釈しか許していない。「童なりけり」の少年は死んで「其霊は自然の懷に返つた」。それよりも「意味」のある六蔵の「死」。六蔵の「死」を見たとき、「私」には、六蔵の生涯、「白痴」としての六蔵の生涯が頭をよぎっている。「数の觀念」がない六蔵。学校では「腕白生徒の嘲弄の道具」にされてしまふ六蔵。しかし、「なか／＼の腕白者」で人を驚かせたり、「城山を駈廻」ったりする六蔵。ほかの子どもたちと少しも変らない子どもらしさを持ちながらも、「数の觀念」が抜け落ちていくという事実。目にした六蔵の「死」は、「白痴」である六蔵の「死」である。しかし、「私」には別の意味がある。「其霊は自然の懷」に返つたと感じる「私」の心に、「私」の心のなかにある「自然の懷」に、「自然の児」として返つていたのである。六蔵は「死」によつて、「城山」で目撃した「自然の児」として永遠に「私」の心に生き続けるのだ。六蔵の「白痴」性は失われ、「自然の児」としての姿が焼き付けられた。「城山」で六蔵を「自然の児」として見たときから、「私」は六蔵を持つ「自然の児」としての姿を自覺的に見ていたのだ。

三、「私」が見た六蔵

「私」は六蔵をどのように見ているのだろうか。

語り手の「私」が、初めて主人公の少年「六蔵」と出会うのは、「今から六七年前」、「私」が「或地方」で「英語と数学の教師」をしていたころである。季節は秋。「或日曜の午後」だった。「私」が好んで登っていた「城山」で読書をして

いたとき、近くで枯枝を集めていた少女たちが「キャッ」と驚き逃げて行く姿を目で追っていくと、「森の奥から下草を分けながら道もない所を此方へやつて来る者」が目に入ってきた。それは「十一か十二歳と思はる、男の児」で、「熟と私の顔を見つめ」、「尋常ではない」「ニヤリ」という笑い方をする、如何にも「唯の児供でない」と分かるものだった。その「児供」に「私」が名前を聞くと、「六」と答えるだけだった。もう一度「私」が「六さんといふのかね。」と聞き直すと、「児童は點頭いたま、例の怪しい笑を洩らして口を少し開けたま、私の顔を気味の悪いほど熟視て」いる。なぜ学校にいかないのかという「私」の質問に対してはなにも答えず、鳥を追いかけるように「ワアくと唾のやうな声を出して駆出し」ていつてしまった。

これが六蔵と「私」の出会いである。しかし、この場面では、「私」は六蔵のことを「児供」もしくは「児童」と呼ぶ。その呼び方に変化が現れるのは、「私」が田口の家の下宿するようになってからだ。田口は「昔の家老職」で立派な屋敷に住み裕福に暮らしていた。六蔵は田口の甥でこの家に住んでいた。偶然にも「私」は六蔵と同居することになる。生活をするうち、「私」は六蔵についての知識を深めることになる。「と言ふのは畢竟私が氣をつけて見たり聞いたから」で、六蔵が「生まれついで白痴」であるのを知る。同時に、十七歳の姉おしげも「白痴と言つてよいほど哀れな女」で、さらにこの姉弟の母親も「普通から見ると余程抜けて居る人」だったこともわかった。

同じ頃、田口の主人から六蔵の教育方法について相談を受ける。そのとき、「私」は「白痴教育」について知っている限りのことを話すに止まった。しかしながら、「おしげと六蔵」をみていると氣の毒にも感じ、「白痴となると、心の唾、聲、盲ですら殆ど禽獸に類して居る」と、遠巻きながら同情を示している。

ところが、その同情は、徐々に六蔵一人に向けられていく。「おしげは兎も角、六蔵の方は児童だけに無邪氣なところがありますから、私は一倍哀れに感じ、人の力で出来ることならばどうにかして少しでも其知能の働きを増してやりたいと思ふやうになりました」。

「おしげは兎も角、六蔵の方は児童だけに」は、この姉弟の母親も含めた成人やほぼ成人に近い「白痴」を対象から外し、「児童」であり「白痴」でもある六蔵をほかの「白痴」の登場人物から差異化し、いかに「私」にとって意味を持つた人物であるかを印象づける効果を持っている。また、六蔵が「男の児」であったこともその理由の一つといえるだろう。家柄としては十分に立身出世も可能なはずなのに、「白痴」であるがゆえに一人の男児として立派に身を立てることはできない。そんな六蔵を思うと、「私」は「一倍哀れに感」ぜずにはいられなかった。このあたりから六蔵の呼び方が「児童」から「六蔵」へと変わる。すなわち、六蔵は「私」にとって他の「白痴」よりも特別な存在になったのだ。

初めは、傍観者の立場から六蔵に同情を示していた「私」だった。しかし、六蔵の母親から六蔵への教育を懇願されると、母親の熱心さに「親子の情」を感じて「六蔵の教育に骨を折って見る」ことを約束する。その後、六蔵への教育を通して、六蔵に知的障害の証しとしての「数の概念が欠けて居ること」と、それとは逆に「木拾ひの唄ふやうな俗歌を暗じて、をりく低い声でやつて」いることや、「なかくの腕白者で悪戯を為るときは随分人を驚かす」という性質があることを知る。

中島は、六蔵の「少年であることが大きく浮かび上がってくる」のは、「空の色、日の光、古い城跡、そして少年、まるで画です。」に到達してからで、特に、「空の色、日の光」によって「六蔵の白痴という属性」がうち消され「少年」性が浮上してくると述べている。⁽¹⁾しかし、実は、「私」は六蔵と真剣に向き合うなかで、「白痴」というフィルターを通したが見え難かった六蔵の固有性⁽²⁾少年らしさを発見している。

六蔵の個性への理解が深まるにつれ、六蔵の呼び方は「此白痴の腕白者」へと変化し、親しみが込める呼び方になる。今までは「白痴」であることを強く意識していたが、その腕白な子どもらしさに目を向けると六蔵が本来持っていた「少年」らしい姿が前面に押し出される。「天守台の石垣の角に六蔵が馬乗りに跨つて、両足をふらく動かしながら、眼を遠く放つて俗歌を歌つて居る」、そんな「少年」の六蔵に出会う。

六蔵に潜む「少年」性に「私」が気がついた瞬間、六蔵がいる風景は一転して「画」になる。「空の色、日の光、古い城跡、そして少年、まるで画です」。六蔵のいる風景が「画」であることを基点にして、六蔵は少年を越えて「天使」になる。「少年は天使です。此時私の眼には六蔵が白痴とは如何しても見えませんでした。白痴と天使、何といふ哀れな対照でしやう。しかし私は此時、白痴ながらも少年はやはり自然の児であるかと、つくぐかんじました」。

「私」は、六蔵に「私」自身の理想である「少年」性や、大自然を自由に駆けめぐる「自然の児」の姿を見ている。「私」の感動は頂点に達する。六蔵の姿を「画」としてとらえる。少年の個性は「画」のなかで「自然の児」という普遍性に変換される。唯一、六蔵が「自然の児」であると気づいた「私」は、六蔵への思いを愛情をいっそう強くする。語り手が偶然「城山」で見つけた少年と「天使」と「自然」が一体となった「画」は、大自然のなかで見つけた風景の一部として切り取られる。年齢的にはあとわずかで「少年」から青年へと成長しなければならぬ六蔵。彼を「自然」の象徴である「城山」の住人であり続けさせたいと願ったのは、他ならぬ「私」の願望である。⁽¹²⁾「私」の願望が、六蔵の姿を「天使」と「自然」が一体となった一つの「画」としてとらえさせ、自分だけのものにさせたのである。

ところが、物語はここで終わらない。六蔵に関する新しい情報によって変換される。「今一ツ六蔵の妙な癖をいひますと」という書き出しの新しい情報は、六蔵が鳥好きで、しかもひよどりや白鷺を見ても全て「鳥」といい、その姿を見ると「眼の色を変えて騒ぐ」というものだった。しかし、「私」はそれを語るとき、六蔵のことを「此児童（またはこの児童）」もしくは「此児」と語る。六蔵のことを「自然の児」としてとらえていた「私」は六蔵が「白痴」であることを必ずしも否定的には受け止めていない。むしろ、「白痴」を強調するあまり見落としていた六蔵自身の個性を最大限に肯定しようとしている。しかし、人間であれば基本であるものの名を覚えられない現実を見せつけられた「私」は、六蔵の個性を認めた上で哀しく「此児」と呼ぶ。

そして、自ら苦勞しながらも心を寄せてかわいがっていた「この憐れな児」の結末を語りはじめる。災難は翌年の三月

末に起きた。六蔵が、いつも人を驚かせていた天守台の下で「死骸」となって発見された。六蔵の死の前に、「私」は日頃の六蔵の様子から推測した解釈を語り始める。「城山」で鳥を追いかけて「ワアくと啞のやうな聲を出して駆出し」たことや「鳥さへ見れば眼の色を変えて騒」いだことから、「六蔵は鳥のやうに空を翔け廻る積りで石垣の角から身を躍らした」と思わずにはいられなかったと。

死骸を葬った翌々日、「私」は天守台で六蔵のことを考える。「人類と他の動物との相違。人類と自然との関係。生命と死」などの問題が胸に去来し、「私」は、ワーズワスの『童なりけり』に誘発されて六蔵に起きた出来事に思いをはせる。第二章でも述べたように、ワーズワスの詩の「梗概」と六蔵の「死」とは重なる。六蔵の「死」の意味を「天使」と「自然」が一体となった「画」のなかに封じることになる。この「梗概」、特に、「其霊は自然の懷に返つた」と記されたことによつて六蔵の魂は自然に返つたことになるが、それと同時に六蔵の存在は「私」が「城山」で偶然手に入れた「画」のなかで永久に生き続けることになる。

六蔵の「死」は、「童なりけり」の「梗概」によつて白痴のかなしい「死」から自然への回帰へと転換する。さらに、「私はこの詩が嗜さで常に読んで居ましたが、六蔵の死を見て、其生涯を思ふて、其白痴を思ふ時は、この詩よりも六蔵のことは更に意味あるやうに私は感じました。」と付け加えられる。「六蔵の死」自体が「自然の児」という普遍性を永遠に手に入れ、貴重な出来事として際立つことになる。

新しい六蔵の墓前で、六蔵の母と話した「私」は、この白痴の「親子の情」の深さを感じとっている。しかし、「私」が母親に対して「不慮の事故だからあきらめるより致方ありませんよ」、「六蔵さんが必定鳥の真似を為て死んだのだから解るものじゃありません」や「六さんは大変鳥が嗜好であつたから、さうかも知れないと私が思つただけですよ」と語る場面からは、「親子の情」だけではなく自分の心の「画」を大切に自分だけのものにしようとする「私」の叫びが読み取れる。母親が鳥のはばたきの真似をしてみせるのをあえて見ようとしなかったのは、「画」にこだわった「私」の意思表

示なのであった。

「童なりけり」の「梗概」など知るべくもない母親にとつて、「私」が語った六蔵の最期が全てである。「城山」から飛び立つ鳥を見て発せられた「この一羽の鳥を六蔵の母親は何と見たでしやう」という「私」の感慨には、母親には六蔵と一羽の鳥が一体化しているという確信が隠されている。そして、「城山」で「私」が見た「画」は、永遠に「私」一人の「画」として切り取られその永遠性は完結することになる。

四、むすび——独歩が描こうとしたもの

「春の鳥」に描かれた「白痴」の少年六蔵の主題について、芦谷信和は次のように指摘している。⁽¹³⁾

「自然の児」である「白痴」の少年六蔵は、夭折したけれども、死によつて「自然」に回帰し、同化し、むしろそこに「永遠の生命」を獲得したのである。そこには「自然」に「神」を見るワーズワース的汎神論的自然観があるとともに、「自然」Ⅱ「道」と一体化することによつて「永遠の生命」を得ることができるといふ老荘的自然観がかげざしているのである。こうして「春の鳥」は自然への回帰・同化を主題とした格調の高い作品となつたのである。

また、中島礼子は、「独歩は、六蔵を鳥好きな少年と設定することにより、ここでは、「城山」で悲惨な最期を遂げた事を逆手にとり、六蔵の「少年」Ⅱ「自然の児」に「白痴」を加味し、「白痴」故に鳥への憧れが高じて鳥になつてしまつた少年として、六蔵の美しいイメージを読者の脳裏に定着することを望んだのではない」かと指摘しつつも「六蔵はこのまま生きていて大人になつても、幸福になつたとは考えられないというのは（略）当時としては、それも無理のないことであり、独歩ばかりを責めることはできない。知的障害者を取り巻く時代的制約のなかで、誰もが持つ空を自由に飛んでみたいという願望を六蔵の「白痴」に込め、六蔵を死して飛翔する鳥として蘇らせることしか、独歩にはできなかったの

であろう。」と述べている⁽¹⁴⁾。

芦谷、中島両氏においては、六蔵の死は、「自然の児」である「白痴」の少年六蔵の死として解釈され、「自然の児」であることと「白痴」であることが未分化のまま同一線上で考えられていた。しかし、これらは同一線上で考える問題ではない。六蔵の「白痴」性は「死」とともに失われるが、「自然の児」としての六蔵は、語り手の心のなかに「画」として永遠に生き続ける。死を通して、「白痴」の少年から「自然の児」へという解放が「私」によって行われたのだ。

「白痴」であることにより近代社会の制度から阻害された六蔵。彼と対峙し誰もが見落としていた六蔵の少年らしさに気がついた「私」。「白痴」でありながらも個性豊かな「少年」として生き、「自然の児」として「画」のなかで永遠に生き続ける。「私」だけに美しい感動を与えた六蔵が、死によって「私」の感動を永遠のものに作り変える。六蔵の死を見た「私」が引き継いだ六蔵の生の意味は、一枚の「画」として完結されている。「私」による六蔵の描写は、語り手の主人公に対する心理的な距離感を現している。目前に広がる景色のなかで、どこに心を寄せて一枚の「画」として風景を切り取っているのか。「春の鳥」は、その一部始終を語った作品であるといえる。「忘れえぬ人々」に描かれた「ほんの赤の他人であって、本来をいうと忘れてしまったところで人情をも義理をも欠かないで、しかもついに忘れてしまうことのできない人々」とは、いかにして選択された人々だったのだろうか。「春の鳥」における「私」と六蔵の関係を手がかりに考察を深めることができるのではないだろうか。独歩の忘れられない風景、忘れられない人々は、必ずしも現実で体験したものだけではない。心にとめた忘れられない瞬間や見たいと望んだ世界を、少なくとも「春の鳥」は語り手である「私」の目を通して具体的に読者に提示した作品であるといえる。

注

(1) 「紀州」は、「物忘れする子なりともいひ、白痴なりともいひ、不潔なりともいひ、盗すともいふ、口実は様々なれど此童

を乞食の境に落しつくし人情の世界の外に葬りし結果は一つなりき。戯れにいろは教ふればいろはを覚え、戯れに読本教ふれば其一節二節を暗誦し、小供等の歌聞て又歌い、笑ひ語り戯れて、世の常の子と変らざりき。」と描かれ、「狂女」は「異形のもの(略)すかし見ると猿ほどの大きさと思はる、が、波を追ひ、波に追れ、そして折りく躍り上がる、自分は大急ぎで学校に帰り夜具を被つて縮み上がつて」とのように描かれており、ただ語り手の前を通り過ぎていくだけで其感や同情を持つて描かれてはいない。

- (2) 小野茂樹は「若き日の国木田独歩——佐伯時代の研究——」(一九五九(昭和三四)・一二、アポロン社)に「白痴少年は、(略)名前を「山中泰雄」と云つて、坂本の主人永年の妹「シゲ」の三子に当る。(略)その時の可憐児について独歩が特記した解察文が「憐れなる児」として残されているが、それにはこの少年の哀れむべき白痴の状態が細かに描かれている。」とある。また、滝藤満義は「国木田独歩論 日本の作家3」(一九八六(昭和六一)・一〇、文芸春秋)に「可憐児」は「憐れなる児」の「別稿」というほどの実質を備えてはなく、「別稿」を予想させるような本文の異同は、両者の間に見られないといつてよい。」といつてゐる。

- (3) 中島礼子「独歩「春の鳥」」(『国士館短期大学紀要第三号』一九九八(平成一〇)三・二)。

- (4) 内村鑑三「流寶録(一) 白痴の教育」については新保邦寛「独歩と藤村——明治三十年代文学のコスモロジー」(一九九六(平成八)・二、有精堂)。「瀧の川学園を観る」については橋川俊樹「春の鳥」——「白痴教育」との接点——(『東京成徳国文第一〇号』一九八七(昭和六一)・三)。

- (5) 独歩が「民声新報」の編集長時代(一九〇一(明治三四)・五・三・四)に一面に「ひんがい」の署名で「瀧の川学園を観る」と題した記事を連載している。

- (6) (3)に同じ。

- (7) (4)の新保邦寛に同じ。

- (8) (4)の橋川俊樹に同じ。

- (8) (4)の橋川俊樹に同じ。

- (9) 「新日本の詩人」(徳富蘇峰、「国民之友」、一八八八(明治二一)・八)、「韻文、山の翁」(山田美妙訳、「国民之友」、一八九一(明治二四)・五・六)、「稚きことを憶ひいで、永劫存をさとの歌」(家永えい子訳、「国民之友」、一八九三(明治二六)・四)、「ヨルツヨルス」(宮崎湖処子、民友社、一八九三(明治二六)・一〇)、「自然界の予言者ウォルズウォルス」(植村正久、「日本評論」、一八九三(明治二六)八・九)、「童ありけり」(宮崎湖処子、「日本評論」、一八九三(明治二六)

・一一) など。

- (10) 例えば、丁貴連「『白痴教育』と文学——田栄澤『白痴か天才か』と独歩『春の鳥』との比較文学的考察——」(『文学研究論集』一九九六・三)
- (11) (3) に同じ。
- (12) 中島は(3)のなかで「六蔵は城山の住人であり続けるわけにはいかない。山の下で、『市街』で、幾分かでも大人になる為の準備教育が六蔵に施されなくてはならない。」と指摘している。
- (13) 芦谷信和「独歩『春の鳥』(二)——虚構と主題——」(『立命館文学』第五一五号)一九九〇(平成二)・三・二〇)
- (14) (3) に同じ。

(博士後期課程二年)